

〔1〕 月曜日 図書貸出カード

派手な音を立てないように出入口の扉を開け、一息。

扉を開けた瞬間に香ってくる古紙の匂いに、何度図書室へ来ても口元が緩みそうになる。それを正す為にもう一息大きく深呼吸した後、入口の札がまだ『開館』のままである事を確認してゆっくりと扉を閉めた。

視線だけを静かな室内へ巡らすも、定められた閉館時間が近いからか人の気配は無くひっそりとしていた。そうして、視線を巡らせた先に居る、此処からよく見える位置に座しまししている図書委員の元へと向かった。

「やあやあごきげんよう、我がクラスの図書委員殿。本日も変わらず麗しい限りで恐悅至極」

誰かを彷彿とさせるよう、わざとらしく両手を広げおどけて見せるが。

「ごきげんよう、えりかさん。何か良い事でもあったのかしら」

このテの編てには既に慣れてしまったのか、ほんわりとした返事が返ってきた。

「……はあ、真つ当に返すなよ。つまらん」

「えっ……?」

「まあいい。本の返却に来たんだ。お前が当番だった事を思い出したからな。新刊は何か入ったか?」

「ううん、今週は特に。でも、顧問教諭の知人の方から近いに何冊か本を寄贈して頂けるといってお話は、昨日伺ったわ」

「へえ! そりゃ、楽しみだな」

「聞いた感じ、恐らく……」

口にしそうになる白羽に右手をあげて言葉を遮る。

「ああ、言わなくていい。当日までのお楽しみって奴だ。なまじ聞いてしまうと期待値ばかり膨らむからな。この前の奴で学んだよ」

肩を竦めて見せると、その時のわたしの反応を思い出したのか、白羽は苦笑の混じった顔で頷いた。

先日、学院関係者から寄贈されたと聞いたシリーズものの文学小説を三冊程借りて、初巻だけを流し読んだ後速攻で返却したという苦い実績がある。余程では無い限りは斜め読みしてでも内容を目を通すのだが。誠に遺憾ながら、その本が一体どのような内容だったのかも、その本の著書名すらも忘れてしまった。有限である記憶容量は、例え一ミクロンでさえ無駄な事には使用したくない主義だ。

「ほら、眠そうなお前に仕事をやろう」

と、いまだぼんやりとしているように見える書痴仲間へ、膝上にあるハードカバーの本を差し出す。書痴仲間は本を受け取るも、僅かな思案顔を向けてきた。

「……そう、見える？」

「ああ、沙沙貴妹並にうすらぼんやりしているな。ぼんやりしているのはいつもの事だが……どうした、委員長が寝かせてくれないのか？」

にやりと卑俗な笑みを向けるも、

「立花さんは、いつも時間通りにベッドに入る人よ？」

などと不思議そうに首を傾げながら、判っているのかいなのか見当もつかない返答を口にした。

「……お前も、今日は時間通りにちゃんとベッドに入った方がいいぞ」

「えっ？ あ、えりかさん……！」

今日に限って一切のポケが通じない書痴仲間に残ろ手を振り、わたしは適当な書架へと車椅子を向けたのだった。



「やれやれ……」

適当に本を見繕い、いつもの特等席に車椅子を着け、溜息

をひとつ。

(白羽の奴、今日一日ずっとあの調子だったよな)

先程のように打てばちゃんと響くのだが、響く方向がいつもと違う。方向だけではなく、響きのキレも落ちていた。

今朝の登校時、学舎のエントランスで会った時はいつにも増して眠そうな顔をしていたと思いつ。

(単なる寝不足……のようにも見えたが)

また何処かで下らない面倒を背負い込んだのだろうか。

自己犠牲は美德ではあるが、行き過ぎれば単に身を滅ぼす行為でしかない。それでなくとも、今の白羽はその身には大きすぎる「課題」を背負っている。

「……ま、もうちょい様子を見るかね」

適当な所で釘を刺せばいい。

それが即効性でなくとも、何処かで有効になるはずだ。

「……ふうっ」

先程よりも大きく息を吐いて、吸い込む。

それから、つい今し方まで考えていた事を頭から追いやる為、膝に乗せていた本の表紙を捲った。



しばらく読み耽った本と続編一冊を膝に乗せ、図書室中央にある執務机へと向かう。

思った以上に読み進めるのが面白く、残りは部屋でじっくりと味わおうという魂胆だ。それに今日は白羽が当番である為、本を借りるのも楽が出来て良い。

つまり、借りる際に図書委員へ名乗り出て貸出の為の個人カードを出してもらい記載する、返却の際にも自らの学年と名前を言う、という手間が一切無くなるからだ。

もちろん、白羽が当番でない時の本の貸出・返却時は自分でカードも書くし、名乗ってもいるが。

「おい、し……」

白羽、と呼び掛ける言葉を慌てて飲み込み、手練った車椅子のハンドリムを握る手に力を込め、車椅子を止める。

想像以上に大きな音を立てて擦れたゴムタイヤの音で起こってしまったかと、目の前の白羽をまじまじと窺う。いまだ無防備に執務机に突っ伏している姿を見て、ほんとと安堵の溜息が漏れた。

(やっばり、寝不足の方だったか)

今日は風も冷たくなく、日も良い。室内温度はこれ以上な

い程の適温だった。そこに加えて、外部からの喧噪もなく、深閑な空気の中に居れば。

(否が応でも目蓋が落ちるって奴か)

白羽蘇芳にとつて、この図書室という場所は心が華やぐ場所であり、また、鎮まる場所なのだろう。

わたしもそうだ。この色々な古紙の匂いが混ざり合った独特な匂いの中に居ると、とても安らぎを感じるのだ。

眠る白羽に目を配り規則正しく上下する背を見て、本当に寝入っているのだと見て取れた。

(此処は居眠りをするには最良の場所だしな)

わたしもよく本を読みかけたまま陽気に当てられ寝落ちている事がある。その時、稀に薄手の膝掛けが肩や膝に掛けられている事があった。恐らく白羽が気付いた時にしてくれているのだろう。

(生憎、わたしはそういった気の利いたアイテムは、持ち合わせてはいないんだ)

出来る事といえば、僅かな時間でもこいつの眠りを妨げることの無いよう、大人しく見守るくらいだ。

(……そういうえば、あんまり見た事がないんじゃないか、こいつの寝顔)

これまでに何度か共に夜を明かした事はあるが、大抵はわ

たしの方が先に寝落ちてしまし、目覚めても白羽の方が先に起きている。低血圧だと本人から聞いた覚えがあるのだが、存外に目覚めは良い方なのだろう。

「すう……」

規則正しい呼吸と同じく、目を閉じた表情も穏やかなものだ。ずっと見ているとこつちまで眠くなってしまうそうだ。

(……ん?)

僅かに目元に暗い影が掛かって見えたのが気になり、目に掛かっていた髪を指先で払い除ける。髪の毛の影かと思っただが、どうやらそうではないらしい。続けて指先でそつと肌を拭うが、汚れが付着している訳でも無いようだった。

(隈か、これ)

それは、わたしが感じていた以上に寝不足が祟っていた、という事に他ならない。

(どうせ、訊いても答えやしないんだろうしな)

妙な所で頭が堅い奴だ。ぎりぎりの際にならないと素直に吐きはしないのだろう。

強請^{ウラナヒ}って聞き出す事も出来るが。

(また、その時ではないな)

まだ執行猶予だ。

ただ、目に余るような事が起きるのなら、躊躇いはしない。

「……つたく」

全てではないが、それに一連する事柄に起因するひとつを自分が担っていると思うと、こうした姿を見るのは少々気まずいものがある。今こいつが不調に見える理由がそうとは決まっていないのかもしれないが。

目元を拭った指先の背で、やんわりと白羽の頬を撫でた。

「もう少し、頼ってくれよ」

多少は人に甘える事を覚えたと思っていたが、肝心な所で踏ん張ろうとする性格は恐らくこれからも直らないのだろう。それならば、自分に出来る事はこいつが倒れそうな時、いつでも手を差し伸べられるように傍にいる事だ。

(ま……わたしも人の事は言えないか)

ふと零れた笑みに被って、

「……………えりか、さん……………」

「ッ?!」

不意に声を掛けられ、慌ててその場を飛び退いた。実質的には飛べないのだが。

「お……驚かすなよ……」

状況をよくわかっていない起き抜けの顔が不思議そうにわたしを見つめるが、

「ごめんね」

何処か含みを持たせた笑みで、簡単にそう口にした。

(……まさか、さっきの聞かれたって訳じゃない……よな?)

身体を起こし僅かに崩れていた襟元を直していた白羽をまじまじと見つめる。その視線に気付いたのか、リボンを直す手を止めると、再度わたしへと向き直った。

「どうかした?」

「いや……何処かの図書委員が居眠りをしていたお陰で、結局最終時間ギリギリまで居る事になっちゃったんだ。とっとと手続きしてくれ」

「あ、はい。ちよつと待ってね」

ずっと膝の上で温めていた本を執務机に投げ出すと、抽斗から手際良くわたしの図書貸出カードを抜き出し、書名や貸出日を書いていく。

自身の貸出カードであるが、わたしの学年や名前さえも白筆ではなく白羽の文字で記してある。このカードに自分で書名を書いたのは最初の数回程度で、後のその殆どは白羽が書いた物だ。別段それが嫌だという訳ではなく、むしろ、わたしは書かれる事を楽しみにしていた。

裏面の一番最後の欄を埋めると、

「カード、新しいものにしておくれ」

と、白羽は迷いもなく新しいカードを取り出し、わたしの

名前や学年と共に残りの書名を記していく。

白羽の字で書き起こされていく自身の名前を見、それを楽しそうに書き起こす白羽の横顔を見て、面映ゆさと同時にじわりと満たされたような心持ちになる。

それが、楽しみにしている理由だった。

後から、図書委員がカードに直接書くのは返却日だけで、新しいカードへの記名は各々の生徒でやってもらおうと図書委員会の部長に話を聞いて、ただ単に自クラスの図書委員が利用者に対してサービス旺盛であっただけである事が発覚した訳だが。

「はい。出来ました」

貸出カードに記入を終え、再度本を差し出される。

「返却は二週間以内、だろ?」

「ええ。お願いね」

「へいへい」

白羽から本を受け取り、また膝の上へと戻した。

「閉める準備をして来いよ。待っててやる」

「少し時間が掛かるのだけれど……いいの?」

「送迎もサービスの内だろ? 顧客は大事にしないと」

「それでは、もうしばらくお待ち下さいね」

笑みを残し、一冊の本を持って入口近くの書架へと消える

白羽の背を見送る。

「……降りそうだな」

ふと目をやった窓の外の色は先程見た穏やかなものではない、どんよりと暗い色に染まり始めていた。

〔2〕 火曜日 転落事故

全ての授業が終わった放課後。

級友との雑談も適当に済ませ帰り支度をしていると。

「えりかさん」

わたしが支度を終えるのを見計らったように、白羽が声を掛けてきた。

「ん？ 料理部があるんじゃないのか？ 沙沙貴どもは揃いも揃って勢いよく教室を飛び出して行ったが」

「ううん？ 今日には料理部も活動日ではないし、図書委員の当番でもないもの」

「そうかい。で、どうした？ エスコートでもしてくれるのか？」

「えりかさんが良ければ」

いつもの溫柔な笑顔の白羽を前に、

「それじゃ、非番で悪いんだが図書室に頼む」

「図書室？」

「ああ。返却期限が今日までの本があるんだ。昨日持って行きそびれた。お前に渡しておけばいい気もするが、期日は守らないとな」

「そうね。判りました」

嬉しそうに笑みで答えると白羽はわたしの後ろに回り、車椅子の押手を握った。

「朝から曇り空だったけれど、一日持ったわね」

教室を出てイズニクの前を通り過ぎ、左手の廊下の先の窓が見えた折、白羽が足を止めてそう口にした。

「そうだな。傘は持っていないから、降らないで欲しい所だが」話につられて窓へ振り向いた視界に黒髪が見え、それを辿り後ろにいる白羽を見上げた。

昨日のうすらぼんやりとした印象が嘘のような涼しそうな目元だ。

普段から寡黙で大人しいせいなのか、雰囲気やこの目元も相まって近寄りがたいのか、話掛ける奴を見る事は少ない。慣れてしまえば全く当たり障りのない、穏やかな笑みが見られるのだが。

（うっすらと見えていた隈も無くなっているな）

心配事は片付いたのか、解決に向かっているのだろう。

どうやら強請って白状させる事はしなくてもいいらしい。

しかし、強情なこいつを説き伏せ口を割らせるのは、存外に愉しいものなのだが。

（だからって、Sではないぞ、わたしは）

「……私の顔に何か付いてる？」

じっと見られている事に気付いたのか、窓の向こうの空を眺めていた白羽がわたしへ向き直った。

「ああ。目が付いているぞ」

「えっ？」

「ついでに言えば、鼻と口もある」

「……………」

次第に呆れたようにも困ったようにも見える笑みを露す白羽を見て、にやりと猫の笑みを向けた。

「悪かったよ。拗ねるな」

「……えりかさんだものね」

「どういう意味だ、それ」

わたしの抗議に今度も笑みだけで答えると、止めた足を進め少し先にある図書室へと。

相変わらず閑古鳥が鳴いている室内には、執務机にぼつんと図書委員が座っているだけで、他に人気は無かった。

「何か本を借りて行くのかしら」

「いや、読み止しの本がまだ部屋にある。先にそいつを読み切ってしまったいから、返却だけのつもりだよ」

「それなら、返却本を貰える？ 手続きしてくる」

「そりゃ助かる」

持っていた鞆から文庫本を二冊引き抜き白羽へと差し出す。本を受け取ると、白羽はそのまま真っ直ぐに執務机の方へと歩いて行った。それを見届けると、わたしも近場の書架へと車椅子を寄せた。

見知ったタイトルばかりが並ぶ色とりどりの本の背を流し見する。

（この辺りは大体踏破したな……ん？）

国内の時代小説が並ぶその中に、置かれているジャンルとしては似つかわしくない単語が混じったタイトルが目にとまった。

（明らかにジャンル違いだらう、シナプスとか。医療系の話か？）

興味から、手の届く位置にあるそのハードカバーの本へ手を伸ばそうとすると、

「えりかさん」

本の返却へ行ってくれていた白羽がわたしを探していたのか、窓側の通路から顔を覗かせた。

「済んだのか？」

「ええ。それで、その」

「ん？ 本に何かあったか？ 特に汚した覚えもないが」

「ううん、そうじゃなくて。委員の仕事を代わりに受けてき

たの。先程いらした部の先輩、体調が優れないようだったから」

と、申し訳なさそうな笑みを浮かべた。

「えりかさんと一緒に戻るつもりだったのだけど……寄宿舎へ戻るのなら、エントランスまで送ります」

「いや、それならそれで、適当に本を見繕うまでだ。問題ないよ」

そう笑みで返すと、ほっと安堵したように白羽は肩の力を抜いた。

「安心して勤めに励め」

「ありがとう」

笑みを残して図書委員の仕事場である執務机へと踵を返す白羽を見送り、先程取り損ねた本を棚から抜き取る。

「……脳科学、か」

手にした本の表紙にある文言を眺めた後、わたしは本を読む為の『特等席』へと車椅子を進めた。



(……ん?)

静寂を破る大きな音に、文字を追っていた目線を側の窓へ

と向ける。

「……おいおいおい」

音の正体は窓の外を激しく濡らした雨音だった。

この数日は晴天や曇天でも降る事はなかったのだが、此処に来て思い切ったらしい。

そんな思い切りは遠慮願っていたのだが。

「……あ」

外の雨に気を取られた所為でページを押さえていた指がずれてしまい、捲っていた本文がほぼ戻り扉のページが現れる。

それを確認してページを捲り直すのが、意識半分で読んでいた箇所が何処だったかを既に思い出せないでいた。

(ここまで読んでも興味が湧かないからな……)

恐らく半分近くまで読み進めては来たが、どうにも興味の触手が働かないのだ。

パラパラと適当にページを繰っていると、

「もしかして、降り出した……?」

雨音を聞きつけたのだろう、執務机の方から白羽が姿を現した。

「降ると言うより、バケツどころか風呂桶をひっくり返したと言った方が合っている気がするぞ。この強さじゃ」

「そうね。今の状態じゃ、傘があってもあまり役には立ちそ

うになさそう。とはいえ、今日は傘を持っていないのだけれど……」

「右に同じ、だ」

窓ガラスを打つ雨粒の強さに多分の批難を込めるが、そんなもので雨脚が弱まる訳でもなく。

「職員室を覗けば誰かの忘れ物や置き傘くらいはありそうだが……それは最終手段だな」

「帰る時までには少しでも弱まってくれたらいいのだけけど」

「最終まで居れば、見込みもない訳じゃないだろうが。まあ、小雨くらいなら濡れて帰っても差し支えはないだろう。替えの制服が無い訳じゃない」

そうは言いつつも、夏の雨とは違い近頃の雨は酷く冷たく感じる事が多くなった。濡れて帰るには少々都合が悪いのも確かだった。

「特に帰りを急いでいる訳でもない。今は取り込み中だしな」

「もう少し穏やかな雨音なら良かったのかもしれないけれど」

わたしが掲げて見せた読み止しの本を見て、白羽が小さく笑った。

「見た事のないタイトルだわ。どんな本を読んでいるの？」

「何がへわたしをへわたし」たらしめているのか」

「えっ？」

「または、何がへ人」をへその人」たらしめているのかを、恐らく、懇切丁寧に説明していると思われる自然科学の本だ。いや、脳科学か」

「随分、難しい本を読んでいるのね」

「興味深いと言えば興味深い、それだけだな」

窓へ向けていた視線を再び本へと戻し、ページを繰る。

たまに見掛ける図解も、一目見ても何が描いてあるか判らない記号の集まりだった。

「どうして脳科学の本がこの学院の書架にあるのかと興味を惹かれて手に取っただけだったが。そうでもない限り、今の所は縁の無い本だよ」

「そんなに、専門的な本なのかしら？」

「ああ。わたしくらいのが読んだって一ミリも理解出来ないだろうよ、専門用語と専門知識のオンパレードだ。寄贈主は何を思って寄越したんだろうな。神の教えを説く学舎で脳科学とは、主の名を騙るマッドサイエンティストでも生み出したのかね」

何となく見知った章の題目が目に入り、ページを繰っていた手を止める。

「寄贈されるのは小説や教義書ばかりではないみたいだから。」

図鑑や年表も学院関係者の方から譲り受けたものがあつたもの。別室の閉架保存でこちらには出してないけれど、歴史的価値があると聞いた書物も数点あつたのを見たわ」

「へえ。案外お宝が集まるんだな」

「そういう古書などを収集している先生がいらっしゃるのかも……ッ!」

刹那、甲高い轟音が図書室に響き、本を覗き込んでいた白羽が弾かれたようにビクリと身体を竦めた。

「……びっくりした……」

「結構デカかったな、さっきの雷」

わたしの言葉が終わらない内に、再度窓の外に稲光が走る。それから数秒遅れて先程と同程度の爆音が鳴り響いた。

再度鳴り響いた轟音に、恐怖とも困惑とも取れる色を強く滲ませて身を竦める白羽を見上げる。

雨で煙っていた空を憂鬱そうに見つめていたのは、これを危惧していたのだろうか。

此処は山の中で、避雷針代わりの高い樹木はそこかしこにある。設備としても何処かに設置してあるのだろう。この建物に落ちてくる可能性はかなり低いと考えても差し支えは無いのだが。

「雷、苦手なのか?」

「苦手というか……突然大きな音が響いて驚くから、それが苦手」

それ以外はどうかという事はない、と小さく口にする。

「つまり雷が苦手って事じゃないか」

「だって、」

反論しようとした白羽が口を開いたタイミングで、今度は稲光と同時に轟音が鳴り響く。

「うう……近くなってる……」

「山の中だからな、致し方無し、だな」

カラカラと笑うわたしを不服そうな顔で見る白羽が、大きく深呼吸をする。

「窓辺よりもお前の仕事場に居る方が多少は違うんじゃないか?」

「何処でも同じだと思う……」

と、不満を漏らしながらも、そそくさとわたしの側を離れて自分の持ち場へと戻っていく白羽に、再度笑みが零れた。

他の奴らと比べると、自分と同世代であるという感覚を普段の白羽にはあまり持てないのだが。先程のような年相応な面を見せられると、やっぱり同じ年だと何故か安心してしまう。

気分転換が出来たような思いでページを押さえていた手を

離すと、再度書かれています文へと目を落とす。

時折小さく響く雷鳴に気を取られながらも、二ページ三ページと読み進めていくが。

「……ふう」

どうにも目が滑って読み進められず、文面から目を離すと一息吐き本を閉じた。

特別面白いと思えないのが、苦心する理由なのだろうか。

興味深さは十分にあるのだが、ただそれだけだ。

よくわからない言葉の羅列を延々と眺めていられる程、気の長い方ではない。とりあえず全てに目を通しておこうとも思えない辺り、今のわたしにとっては詰まらないものなのだろう。

指先で眉間を揉み解している最中、カタンと揺れた窓枠の音に顔を上げる。

(まだそんなに勢いは変わっていない、か)

先程よりは幾分か収まっているとはいえ、ずぶ濡れにならないように寄宿舎へ戻ろうとするならば、まだ十分に強い雨脚だ。もう少し勢いが落ちてくれたら、被害も少なくて済みそうなのだが。

「もう少し待ってみるか……」

制服のスカートのポケットから懐中時計を引っ張り出し時

間を確認する。

あと数分で、本来の委員会活動時間が終了する。そこから最終下校時刻までは、いち図書委員の厚意による時間外活動だ。

(本に触れる時間を増やしたいだけなんだろうな)

委員会の仕事が時間内に終わらずやむを得ず残業している訳でも、居残る事を上級生や顧問教諭に強制されている訳でもなく自主的に行っている理由は、それが大きな所なのだろうと理由付けた。

単身で居残る事を咎められないのも、白羽の仕事が常に正確であるからだろう。

他の委員も頼り切りにしている所を見るに、図書委員としての確固たる地位は押さえていると見て間違いない。

(此処が過ぎやすい場所であれば、どうでもいいんだが)

あいつ自身が書痴であるお陰か読書中には必要以上に構われる事も無く、必要な事は訊ねれば粗方解決する。将来は資格を取って司書にでもなれば十分に白羽の特性も生かして幸せであるのではないかと思うが、それは本人が決める事だろう。

「……さて。時間がまだあるなら、他を当てるか」

降り続く雨模様空を睨んだ後、膝上の閉じた本の表紙を見る。それから、凝り固まった背筋を伸ばす為大きく背伸

びをした。

「んーっ……っあ」

背伸びをした際に膝上から滑り落ちた本が床へと転がった。「つたく……。そんなに嫌なら、元の場所に戻してやるよ」

車椅子から少し身を乗り出し本へと手を伸ばす。

が、余程わたしとは相性が合わないのか、伸ばした指先から逃れるように滑って取り上げる事が出来なっていた。

「くそっ、触られるのも嫌って奴か？」

少し場所を変え、今度は大きく身を乗り出す。

「よっ、ととお!? うわ……!!」

必要以上に勢いが付いていたのか、落ち着いたと思っていた唐突に鳴り轟いた大きな雷鳴に驚いた事もあって、加減が効かず車椅子の片輪が大きく浮き上がった気がした。

「やば……っ!!」

そのまま勢いを殺せず床へ投げ出されるが。

「ぐっ……」

倒れた方向が悪かったのか、途中、頭を庇った腕の隙間を縫い側にあった机の脚にしたたかに頭を打ち付けてしまった。

「いっ、てえ……」

ここしばらくはこんな下手を打つ事が無かった所為か、咄嗟の受け身もちゃんと取れずに床へと転がる。

ずきずきと拡がってきた鈍痛に左側頭部を抱えるように身体を丸め悶えていると、

「すごい物音がしたけど一体何が……えりかさん!」

倒れているわたしを見て慌てた白羽が側へ駆け寄って来た。

「一体何が？」

「……見ての通りだよ」

助け起こしてくれた白羽に心配そうに覗き込まれるが、自分でこの状況を説明するのはあまりにも格好が付かない。

ここは勝手に推察して貰う方が幾分か心が平穩に違いない。

「最たる原因は、そいつだ」

と、視界の端に居た、取り損なった上製本を顎で指した。

指し示した本を見、それから倒れた車椅子、頭を庇っているわたしを見遣り、

「本を取ろうとして、倒れてしまった……?」

と、恐る恐るわたしに訊ねて来た。

「それ以外に、どう見える？」

「椅子に乗り損ねてしまったのかと思ったわ」

机にぶつかっただけに散らかってしまった椅子の座部がこちらを向いていたからか、白羽はそんな事を口にした。机が動いた跡や車椅子が倒れている方向も相まって、状況証拠だけで量るのならそう見えたのだろう。